種差小

“全員参加”で学びを深める子供の育成

～複式学習において問いを生む授業づくり（国語科）～

（３年計画の１年次）

校長　　寺　口　朋　男

１　研究主題について

教育目標「自ら学ぶたくましい子」の具現化のためには、身に付けた知識及び技能を活用し、自ら考え表現し合いながら主体的に学ぶことのできる資質や能力の育成が重要であると考える。これを受け、昨年度は複式学習において主体的・協働的に学びを深め合う授業づくりについて、算数科をパイロット教科に据え研究を進めた。効果的な学習指示の在り方を工夫するとともに、ガイドを中心とした学びを進める授業づくりに努めたことにより、間接指導場面において、主体的・協働的な学びが見られるようになってきた。また、間接指導場面における児童の学びの状況を把握するための工夫や同時間接指導を意図的に設定し俯瞰して学習状況を把握したことにより、思考が途切れることなく学びを継続させることにつながった。一方、算数科においては問いを生む工夫や児童の思考をつなげるための手立てを日常的に行うことができるようになってきたものの、他教科においてはまだ十分とは言えない。また、間接指導場面において児童がガイドを中心に考えを出し合い比べ合う力は身に付いてきたが、お互いの発言に対する解釈の度合いが不十分であることから学びが深まらない点が課題として挙げられた。

そこで今年度は、算数科の指導で取り組んできた「問いを生む工夫」や「学びの継続」を国語科に広げて、問題解決への必要感・切実感を高め、間接指導場面に入ってからも解決への意欲が継続される導入（直接指導）の在り方について研究する。また、話合いの中でお互いの考えを解釈し合い、学びを深める授業づくりについて研究を進める。少人数でも“全員参加”で生き生きと学ぶ児童の姿を生む授業づくりについて、授業実践を通して明らかにしていきたい。

２　研究のねらい

複式学習において、主体的・協働的に学びを深める子供を育てるために、効果的な指導法を国語科の実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

複式学習において問いを生む授業づくりを日常化することにより、主体的・協働的に学びを深め合う力を高めることができると考える。

４　研究内容

(1)授業の導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけ

ア　問いを生む工夫（思考のズレを生じさせるしかけ）

イ　児童の思考の文脈に沿った課題設定（立場の相違の顕在化、問いの明確化・焦点化）

ウ　間接指導場面の学びの状況把握

(2)考えを深め合う話合いの在り方

ア　分かりやすく説明しようとする意識・態度（根拠を明確にした説明、確かめながら説明）

イ　解釈の活動場面の設定（ある児童の考え方を他の児童が説明）

５　研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	内容・学年・題材名・授業者
６	２８	３年「こそあど言葉を使いこなそう」４年「新聞を作ろう」授業者　山内　温子
７	１８	教育指導課・総合教育センター訪問
９	１１	１年「うみのかくれんぼ」２年「どうぶつ園のじゅうい」　授業者　小林美奈子
１１	１	５年「たずねびと」６年「やまなし」　授業者　野里　貴広
１１	１５	南浜中学校区小・中ジョイントスクール推進事業

(2)一般研修

月	日	内　容　・　講　師　等
４	３	非違行為根絶のための研修　講師　教頭　山口将貴
５	３１	種差地域学習素材に関する研修 講師　種差海岸観光協会会長　柳沢卓美氏
６	７	救命法　講師　八戸東消防署　鮫分署　職員
６	１３	三八管内複式担当者研修会　階上町立階上小学校
８	３０	県学力調査採点及びNRT分析結果についての考察と対策
１０	２５	道徳授業参観ウィーク

６　研究の成果

(1)本時のねらいに近づくためのきっかけとなるしかけを意図的に行った。思考のズレを生じさせる工夫を講じたことにより、課題を解決したいという意欲を高める（＝問いを生む）ことができた。

(2)同時間接や同時直接指導場面の意図的な設定により、俯瞰して両学年の学習状況を把握できたとともに、児童自身も学習の深まりを実感していた。また、活動内容の明示等の工夫により、児童が自分たちで学びを継続しようとする意識と技能が育ちつつある。

７　研究の課題

(1)問いを生む授業づくりにより、自分たちで学びを進めようとする児童の力が伸びつつある。今後は、単元を絞って教材のねらいを明確にすることにより、深い学びを実現するための効果的な学習活動について協働的に研究を進めたい。

(2)少人数で親和的な関係であるがゆえに、明確な意見交換がないままに何となく話合いが成立してしまうような場面が見られた。考えを深め合うためのよりよい話合いの仕方についてさらに研究を深めたい。

（記入者　小林美奈子）